格差の格大に寛容でいられる，2）干ばつによる農業への直接的な打撃は，農村住民の所得を減少させ，都市農村間の所得格差を問題視させる，3）出稼ぎ経験者は都市での居住労働経験があるため，都市農村間の格差拡大を問題と思っている，である．

最後に，終章「どこへ向かう中国型資本主義」では，先ず近年の中国経済の変調に焦点を当て，その経済の変調に対する取り組みとして，為替・金融制度改革を指摘している．中国が「二重の罠」を超えて，「新常態」へのソフト・ランディングに成功するためには，深刻化する格差・腐敗問題への取り組みが必要不可欠であると指摘している．腐敗の抜本的な解決のためには，共産党の一党独裁体制という政治システムと国有企業が大きなウェイトを占める経済システムを改革する必要があるとしている．そして，中国が35年間にわたり高度成長を実現できた理由の一つは，中国が形作ってきた現行の経済システムの優位性にあるが，中国自身が実現した経済成長の結果と中国を取り巻く国際環境の変化に伴い，現行のシステムの持つマイナス面が次第に顕在化していると指摘している．最後に，マクロ経済の実態，提起された政策とその実施状況から客観的に判断する限り，中国型資本主義は，徹底した市場化改革を実施する方向へ舵を切ったわけでなく，「曖昧な制度」を温存したまま「新常態」へのソフト・ランディングを模索しているようであると指摘した点は，注視に値する．

本書の第一の特徴は，加藤弘之氏が中国経済の分析において提起した「曖昧な制度」の考え方を，本書の多くの章の筆者が踏まえて分析していることである．中国経済の発展は，新古典派経済学では中々明確に分析できない面があるが，「曖昧な制度」の概念を用いて，様々な分野を分析している．第二の特徴は，一冊の書の中で，「中所得の罠」と「体制移行の罠」を同時に検証しようとしている点である．第三の特徴は，多くの章で個票，企業データ，省別マクロデータ等を用いて，様々な回帰分析手法を用いて，厳密な実証研究を行っている点である．これらの優れた点は，高く評価できる．

次に，本書の扱われている対象は，沿海地域についてのデータが多く，中国経済を考察する場合に，異なった地域でその結果が異なる可能性が考えられる．今後，データの利用可能性の問題があるが，沿海地域だけでなく，他の地域を対象とした実証研究が行われることが期待される．中国経済の高い成長率は，「曖昧な制度」の中で続いてきたが，国内外の環境の変化により「曖昧な制度」の中で継続的な高成長がどれだけ続くのかは，注視する必要がある．

最後に，本書は「曖昧な制度」を用いて「中所得の罠」と「体制移行の罠」を分析している野心的な書であり，今後の中国経済研究の指針となる重要な書であると言える．本書の各章の筆者は，各々が各章の課題を提起している．今後，それぞれの課題の研究が継続して行われ，検証していかれることを期待する．

（関西外国語大学）

注

1）加藤（2016年，p. 30）．

参考文献

加藤弘之（2016）『中国経済学入門：「曖昧な制度」はいかに機能しているか』名古屋大学出版会．

朱寧（2017）『中国バブルはなぜつぶれないのか』（森山文那生訳）日本経済新聞出版社．

Easterlin, R. A. (1974) Does Economic Growth Improve the Human Lot? Some Empirical Evidence, David, Paul A. and Melvin W. Reader (eds.), *Nations and Households in Economic Growth: Essays in Honor of Moses Abramovitz*, New York: Academic Press, pp. 89–125.

宇山智彦・樋渡雅人編著
『現代中央アジア：政治・経済・社会』

（日本評論社，2018年，xv＋286pp）

堀江典生

本書は，中央アジア研究の第一線で活躍する研究者が集い編纂された意欲的な研究書であると同時に，この地域を知ろうとする初学者にとっても中央アジアの諸問題を俯瞰できる優れた教科書となっている．中央アジア諸国は，比較的安定した状態にあるとはいえ，ソ連からの独立から25年間大統領を務めたウズベキスタンのカリモフ前大統領が2016年に死去し，ミルジヨエフ政権になって間

もない状況での出版になったにも関わらず，最新の情勢を踏まえたものにしようとする意気込みが，随所に看取できる．

本書は，政治，経済，社会の三部構成となっている．本書冒頭の「はじめに」で書かれているように，中央アジア研究における文化人類学的研究の飛躍的発展がもたらした成果も第Ⅲ部で加味しており，本書をより包括的な中央アジア論にしている．これは本書の特に優れた一面を表すものであり，多様な関心をもつ読者を中央アジアに誘っている．また，歴史的に地域全体の「共通性が緩やかに形成」されているとはいえ，1991年に独立して以来30年近くも経過した現在，中央アジアに多様性が目立つようになることは自然なことである．徐々に中央アジアの各国論が注目されるなか，それぞれの国々をまとめるだけでもたいへんな地域において，現代中央アジアをひとつにまとめて論じることは並大抵のことではなかろう．以下，本書の構成に従って，各章を概観していこう．

本書の構成は，以下のとおりである．

第Ⅰ部　政治編
- 第1章　現代政治史：歴史的背景・ソ連の遺産と独立国家建設
- 第2章　政治体制と政治制度：権威主義体制の制度と統治の多様性
- 第3章　国際政治と安全保障：国際社会の変容との連動
- 第4章　環境問題と環境政策：ソ連時代の負の遺産と新たな課題

第Ⅱ部　経済編
- 第5章　市場移行政策とマクロ経済：移行改革の帰結と今後の課題
- 第6章　中央アジアの雇用・貧困と社会保護制度：現状と課題
- 第7章　国際経済とビジネス：5カ国五様の商機とリスク

第Ⅲ部　社会編
- 第8章　経済変動のなかの家族・親族：生活設計と協働・互助・対立
- 第9章　社会再編のなかのイスラーム：地域における生き方の模索
- 第10章　教育と国家建設：独立後の教育にみる人材育成
- 第11章　労働移民の社会的影響：移動と送金がもたらす変化

第1章と第2章が取り組んだ中央アジアの共通性は権威主義的体制であり，同時に，その多様性である．第1章は，中央アジア諸国がソ連が建設した民族国家であること，「ソ連文明」というべきものが人々の意識のなかに根付き，秩序が形成されていること，公式の制度とそれを補完する非公式行動の二重構造があることを，ソ連の遺産と捉え，権威主義的体制を支える重要な共通点としつつ，各国の権威主義的体制の多様性を各国の現状に照らしながら説明する．そして，ソ連の遺産が根強いこと，ロシアの影響力が続いていることからポスト・コロニアル状況が中央アジアにあることを論じている．第2章でも，権威主義的体制を中央アジア諸国の共通点として取り上げ，特に第1章と共通して公式の制度とそれを補完する非公式行動の二重構造に着目し，公式の制度としての立法府・執行府・司法府・政党・選挙といった政治制度に着目し，そうした公式の制度に中央アジア共通のクライアンテリズム・ネットワークとそこから生み出される大統領と地方エリートのあいだの権力関係，非公式の政治実践が介在し，閉鎖的な権威主義的体制に至ることを防いでいることが論じられている．公式の制度だけでなく，インフォーマルなネットワークの分析が不可欠な点，初学者に中央アジア政治論の研究の方向性を示すものとなっている．

第3章は，パワーシフトが生じている国際社会のなかで，中央アジアをめぐる地域安全保障がどのように変化し，テロや反体制武装勢力の動向を踏まえつつどのような地域協力構想のもとで安全保障が構築され，地政学的変化に連動して中央アジアはどこに向かうのかを論じている．中央アジア諸国を取り巻く国際環境や地域協力の枠組み，直面する安全保障上の課題をしっかりと捉えながら，中央アジアの課題を検討しているために，読者は自ら今後の研究にあたって展開すべき課題を本章に見いだし，発展させることができるだろう．というのも，本章のどの問題をとりあげても，見えてくるのは先行きがわからないということであるからだ．

第4章は，中央アジアの独立後の環境問題を総覧しつつ，中央アジア最悪の環境問題であるアラ

ル海の縮小とそれに伴う災害に焦点をあて，中央アジアの水資源管理の難しさを論じている．評者自身，ロシアへ労働移民を送り出しているタジキスタン北部の農村地域を調査した際に，農村の水資源管理に地域コミュニティが頭を悩ませている実態を目の当たりにした．コルホーズやソフホーズが解体し，それらの土地や経営が民間に移行された結果，家族中心の個人所有型農場としてのデフカン農場が農業機械などの生産手段の所有・整備や灌漑用水などの水資源管理を担っているものの，デフカン農場だけでは管理・維持が難しく，ソ連時代の集団農場の枠組みを事実上維持しながら経営しているところも多いという印象をもった．アラル海流域プログラムで農民水利用組織の設置が求められているものの，受益者負担もままならず，財政基盤の脆弱性から組織維持が危ぶまれているとの本章の指摘は，なるほどと腑に落ちた．環境行政をチェックすべきNGOの活動にも圧力がかけられ，思うように環境行政の透明化が進まない実態など，権威主義的体制の負の影響が垣間見られ，第1章や第2章とのつながりで読むのも興味深い．

第Ⅱ部は，経済編である．第5章は，冒頭において市場移行政策の基本的な考え方，「急進主義」と「漸進主義」という市場移行政策の実施手法についての基本的な見方，移行初期の経済ショック，そこからの回復と経済成長路線の分岐，その結果としての天然資源賦存に由来する国家間の経済格差を簡単に説明している．また，経済自由化，企業私有化，金融改革，農業部門に着目して，各国の市場経済移行の進展を概観し，中央アジア諸国が資源供給地であることから，天然資源依存を近年著しく高めると同時に，2000年代以降の中央アジア諸国の経済成長を背景とした消費市場・小売業の発展が著しいことを指摘している．また，ウズベキスタン，タジキスタン，クルグズスタンなど労働力をロシアに提供する国々において，GDPに占めるロシアからの海外送金額が大きく，海外送金に著しく依存した経済になっていることが中央アジア経済の大きな特徴のひとつであるとしている．そうしたなか，国内の産業振興，産業の高度化・多角化が課題であるにもかかわらず，カザフスタン以外に目立った成果が現れていない現状が示されている．こうしたことから，産業の多角化や国内産業振興こそが中央アジア諸国の課題であると結論づけている．駆け足ながら，中央アジア諸国が経済において抱えている諸課題が初学者にもわかりやすく，また，隈なく論じられている．

第6章は，雇用，貧困，社会保護制度を取り扱っている．中央アジアでは域内の生活水準の格差が急速に拡大しており，貧困・不平等の拡大が重要な論点であるものの，貧困の原因と目される失業については，移行不況を経験した他地域と比べて深刻とは言えないようだ．それは「隠れた失業」の存在と賃金調整に起因するものだという．特に就業率の低いタジキスタンに着目し，その原因は，農業が支配的な産業構造からの変化が乏しく，非労働力化が進行し，多くの海外への出稼ぎ労働者を生み出しているためだとしている．近年の経済成長により貧困も緩和されてはいるが，農村の貧困リスクは相対的に高く，若い世代の貧困，働く貧困者の問題も指摘されている．こうした分析を踏まえ，中央アジアでは必要とされる貧困層に十分に社会保護がいきわたらず，社会保護のターゲティングの精度を高め，生産性が高くディーセントな仕事を創出することが必要であるとの著者の主張は，広く首肯できる結論ではないかと思われる．

第7章は，国際経済とビジネスに関する章である．中央アジア諸国の対外貿易関係を外観し，EUとの貿易関係が最も強く，近年では中国がEUに次ぐ貿易相手となっている．カザフスタンが中央アジア域外との貿易を牽引しており，特に資源輸出がそれを支えている構図が描かれている．中国の「一帯一路」とロシア主導のユーラシア経済同盟がせめぎ合う中央アジアにおいて，資源開発および調達の多角化の課題を共有するEUとの経済関係の他，米国，トルコ，韓国，日本などの独自の経済関係についても触れられている．また，外資系企業の活動を，資源開発と輸送，工業と建設業，サービス業に分けて俯瞰し，国際ビジネス環境の課題を具体例を交えながら論じている．日本の質が高い製品やサービスが中央アジアにおいて存在感を示す可能性も示唆されており，まだまだ日本にとって遠い中央アジアとのビジネスに読者は思いを馳せることができよう．

第Ⅲ部は，社会編である．第8章は，オアシス地

帯定住民としてのウズベク人とタジク人，遊牧民であったそれ以外の民族に分けて，農村における日常生活の家族や親族とのつながりを論じる．中庭を囲む農村家屋の写真を交えながら，その家族世帯，そして「拡大家父長制家族」を説明するあたり，実際に夏の日差しを浴びながらタジキスタンやウズベキスタンの農村家屋の扉を開き，中に入っていくような既視感を読者は覚えるかもしれない．遊牧民であった民族では，父系クランが重要としつつ，ソ連時代の農業集団化に伴う定住化において政府より住宅用敷地が分与された経緯から家屋は末息子が受け継ぎ，他は独立して自信の家屋を建てて独立していく姿が描かれている．ソ連崩壊後，農村で支配的であった集団農場が解散し，それぞれの家族の生活設計に多大な影響を及ぼした．カザフスタンでは村民同士の幅広い協働，ウズベキスタンでは大規模協同組合であるシルカットや中小規模農業経営体であるフェルメル，トモルカ，デフカンなどに支えられながら兄弟・親世帯間の相互扶助により生活設計がされている一方，クルグズスタンでは耕地私有化により家族・親族間の関係が冷え込む例もあり，それぞれのあり方が経済変動のなか生き抜く選択であったと結論づけている．活き活きとした描写が印象的な章である

第９章は，地域社会におけるイスラームの役割を論じている．日常生活のなかでのイスラーム実践を祝祭，儀礼，聖者崇拝，治療者活動を通して説明し，それらの実践を通じてイスラームが日常生活のなかで重要なものとなってきたことが論じられている．こうしたイスラーム実践は，地域社会における社会的紐帯にとって重要な役割を果たし，世帯間の相互扶助的ネットワークだけでなく，互酬が期待できない人々をも巻き込む共生関係を生み出しているという．ただし，イスラームが地域社会において新たなつながりを生み出す一方で，民族的伝統とイスラームとの緊張をはらんだ関係も意識されるようになり，新たなイスラームのあり方を受け入れがたいと感じる人々も多く，イスラームのあり方がいまも模索されており，他の様々な宗教とも向き合いながら人々は生活しているという．イスラームの教義を重視するか，中央アジアの伝統を重視するのかという二項対立を越えて，日常生活のなかでイスラームが再解釈されていく過程を丹念に見ていく必要があると著者は訴える．イスラームが地域社会に根ざしながらいかなる展開を遂げていくかを日常生活の視線から突き詰めるという，文化人類学的アプローチにおける重要な研究の指針が提示されている．

第10章は，教育についての章である．旧ソ連時代の「単線型」に近く「分岐型」の教育制度を中央アジア諸国は受け継ぎ，初等教育および前期中等教育までは教育機会の「均等」を維持しつつも，後期中等教育以降の教育において「エリート」と「マス」の二極化が進み，教育による階層の再生産が顕在化しているという．統制された教育制度のもと，人々の階層化が進み，学歴により個人が社会のなかで割り振られ，それにより政治体制や官僚機構，権力構造が形成されているとの指摘も，興味深い．また，中央アジア諸国が独立後も諸民族間の交流語であるロシア語の習得と階層との関係は維持されるなか，国家語を優先する言語教育政策との矛盾も見られ，個々人の自己実現の意志と国家の戦略が絡み合い，混沌とした状況になっているという．最後に，生涯教育にも触れつつ，国家の人材育成政策と人々の自己実現の齟齬が中央アジア諸国に生じていることから，教育における国家と個人の関係，教育の本質を中央アジアから反省すべきことが結論として示唆されている．

第11章は，労働移民によって生じる故郷の家族や地域の生活や価値観の変化という幅広い現象に対し文化人類学的接近を試みている．ロシアで働く労働移民の多くが劣悪な環境で居住・就労しており，ロシアの地域住民との間に軋轢も生まれているという．また，移民たちは，男性は故郷の厳格な家父長制から解放され，女性の労働移民たちは故郷での夫婦のあり方を再考し，また，異なる宗教的風土に自らをおくことでイスラーム信仰に目覚める者もいるように，移民の経験は，故郷の家族関係や社会に大きな影響を与えているようだ．人生儀礼が労働移民の重要な動機として挙げられ，労働移民の海外送金の一部が人生儀礼における饗宴や贈与を通じて親族・近隣住民へ再配分されることもあるという．そのため，海外送金は次世代教育やビジネスへの投資に向かわないという問題なども指摘されている．一方で，海外送金は故郷のインフラ整備や投資にも充てられ，新たな消費文化を

生み出すとともに，頭脳流出や性感染症などの問題を故郷にもたらしているとも指摘している．大量移民の時代の男性不在の状況において，女性は伝統的な社会構造や家父長制度の犠牲になるばかりでなく，女性自身がそれらの再生産に積極的な役割を果たす場合も見受けられると同時に，女性移民による経済的成功が既存の社会規範に変わるモデルを提示する可能性も出現していることなど，ムスリム女性を伝統社会の単純な犠牲者とするのではなく，いまそこにいる女性の環境の変化に寄り添い，移民という現象に留まらず，イスラームの女性のあり方を冷静に展望するあたり，示唆に富んでいる．

本書は，岩﨑一郎・宇山智彦・小松久男編著『現代中央アジア論：変貌する政治・経済の深層』（日本評論社，2004年）を旧版とし，その趣旨を受け継ぎつつ，執筆者陣を入れ替え，新たな関心や旧版出版以降の変化を反映させた内容となっている．旧版を傍に置きながら本書を読めば，現在においても中央アジアではソ連的刻印からどのように脱却するのか，または，どのようにソ連時代の制度や関係を戦略的資源として経路依存的に継承していくかが，大きな論点であり続けている．ソ連の遺産，非公式行動，安全保障面でのロシアの影響力，アラル海の問題，市場経済化の進展度，旧ソ連的教育制度の残存など，各所にこうした論点が展開されている．同時に，中国のこの地域に対する関与や大量労働移民の存在など，旧版には見られない新たな変化を取り込んでいる．古くからの問題と新たな問題を旧版と重ね合わせて考察するのも，中央アジアの変化を理解する上で，非常に興味深い．

ロシアの中央アジアに対する影響力が再強化されると同時に，中国の影響力も大幅に増すなか，中国の中央アジアに対する影響力を論じる箇所は，第三章と第七章において「一帯一路」や上海協力機構に絡んで論じられている以外は，目立った検討がなされていない．特に多くの読者にとってもこれは高い関心事であることから，中国の影響力に言及している箇所を本書で探すというより，独立した論考があればとも感じた．また，中央アジアを理解するうえで，こうした地域研究を通じて我が国はどのような関係を構築していくべきか，本書のまとめとして提示がほしいところである．ただし，ないものねだりの書評は慎むべきで，それはわたしたち読者にゆだねられた課題であろう．

本書の社会編が，旧版に比べて彩りのある書としていることは，特筆すべきことである．中央アジアに生きる人々の日常生活から中央アジアの実態を理解する手助けとなっているという中央アジア研究に対する文化人類学的な貢献を評価したいだけではない．遠い中央アジアを自分たちに引きつけ，これまで知らなかった世界を意味ある世界に読者がしようとするとき，地域に生きる人々の豊かな情景はそうした読者の試みを支えてくれるだろう．政治が動き，経済が動き，環境が荒廃し，国際関係が流動するなかで，そこに日常生活を送る人々がいる．その気づきが本書を色彩豊かにしている．

（富山大学）

Peter Havlik and Ichiro Iwasaki, eds., *Economics of European Crises and Emerging Markets*

（Palgrave, Macmillan, Singapore, 2017, xxiv+308pp）

吉井昌彦

本書は，2014年に立ち上げられた一橋大学経済研究所とウィーン国際経済研究所（旧比較経済研究所）との共同研究「欧州危機と新興市場の経済学」の研究成果であり，2016年12月１，２日にウィーンで開催された同研究プロジェクト主催のワークショップにおける報告に基づくものである．

欧州連合は，石炭鉄鋼共同体，経済共同体，原子力共同体の設立に始まり，欧州共同体を経ながら，統合の深化と拡大を果たしてきた．関税同盟，共通農業政策に始まり，市場統合，共通通貨ユーロの導入により，その統合を深化させ，加盟国数は原加盟国の６カ国から2013年のクロアチア加盟により28カ国に拡大した．2000年代は欧州統合の成果がいかんなく発揮された時期であった．しかし，グローバル金融危機以降，ユーロ危機，移民・難民問題，ナショナリズム（極右）の台頭，ウクライナ・ロシア制裁問題，英国のEU離脱等が加わり，EUは揺らぎの時代，危機を迎えている．